

サマータイムマシン・ブルース

2005(平成17)年6月27日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督・プロデュース＝本広克行／原作・脚本＝上田誠／出演＝瑛太／上野樹里／与座嘉秋／川岡大次郎／ムロツヨシ／永野宗典／本多力／真木よう子／佐々木蔵之介／三上市朗（東芝エンタテインメント配給／2005年日本映画／107分）

……タイムマシンをテーマとした映画は多いが、そのほとんどは大きく変わった「過去—現在」あるいは「現在—未来」の乖離が面白いもの。しかしこの映画は、昨日と今日のタイムトリップを何回も……。その意味では、タイムマシンの活用も小粒になったのかも……。しかしそのおかげで、タイムマシンにまつわるさまざまな「理論」が解明……。もし今日のオレが昨日へタイムトリップして昨日のオレを殺したら……。今日のオレはいないはず……。すると……。あなたの頭がこんがらがることまちがいなしたが、この映画はどのような結末に……？

映画と演劇

この映画は既に劇団「ヨーロッパ企画」の演劇として2001年8月に初演された作品を本広監督が観て気に入り、映画化を狙ったとのこと。舞台上の有名なミュージカルが映画化されたものは、『サウンド・オブ・ミュージック』『マイ・フェア・レディ』『南太平洋』など数多いし、最近の最高傑作は『オペラ座の怪人』（04年）だった。また、有名な演劇を映画化した日本の名作には『父と暮せば』（04年）や『笑の大学』（04年）などがある。そしてこの作品は、ニコール・キッドマンが主演した『ドッグヴィル』（03年）と同じく、ちょっと変わった「演劇風映画」……。

今日は試写会終了後、本広監督や脚本の上田誠そしてヨーロッパ企画のメンバーたちが舞台上に登場して、いろいろとおしゃべりをしてくれたが、その中でも演

劇と映画の違いが1つの大きなテーマとなった。演劇では絶対ムリだが映画では簡単なことは、1人の人間が同じ場面（スクリーン）に登場すること。また演劇では時間軸をずらすことはもちろん可能だが、アッチに回し、コッチに回しと多用することは舞台の構成上難しいし、ムダを生むことになってしまうが、映画ではそれをいくらかでも自由にすることができる。もちろん私はこの演劇を観ていないから、私自身の比較論を述べることはできないが、この映画を面白くさせている最大の理由は「パズルあわせの妙」だから、その点、映画は非常に便利。したがって両者を比較すると、多分映画の方が面白いのでは……？

だって私もこの映画を1回観て、全部そのパズルが解けたわけではなく、「あれは一体何だったのだろう……？」と考えていることもあれこれあるのだから……。

「裁判問題研究会」は学生運動の巣窟だったが……？

近々出版される私の『がんばったで！31年 ナニワのオッチャン弁護士 評論・コラム集』の序章は「私の青春時代」。そしてその冒頭には「17歳のころ」がある。これは2001年10月12日の朝日新聞夕刊に掲載されたものだが、そこには私が1967年4月に18歳で大学に入学し、「裁判問題研究会」というサークルに入り、学生運動にのめり込み、ビラ書きとアジ演説に明け暮れる中で「書き弁」と「喋り弁」としての訓練をしてきたことが書かれている。このように、この時代のわが「裁判問題研究会」や同じ部室にあった「部落問題研究会」は民青系学生運動の巣窟だった。しかし、この映画における「SF研究会」と「カメラクラブ」は……？

SF研究会は現代風若者の巣窟……？

この映画の舞台は本広監督の故郷である香川県にある四国学院大学とのこと。8月20日という夏休みの中、SF研究会の5人の男子学生とカメラクラブの2人の女子学生が、なぜこのキャンパス内の部室にいるのかというと、それはあくまでサークル活動のため。そのことは、カメラクラブの柴田春華（上野樹里）と伊藤唯（真木よう子）を見ればすぐにわかる。つまり彼女たちは、SF研のメンバ

ーが、クソ暑い中、誰もいないグラウンドでダレた(?)野球を楽しんでいる姿をカメラ撮影することによって、「何か」を表現したいと狙っているわけだ。

しかし、SF研のメンバーたちが集まっていることの意味やその共通の目標は……? そんなものはこの映画からはサッパリ見えてこない。そしてこのことは、30年後のSF研のメンバーである未来人の田村明(本多力)と現メンバーとの間の、そもそも「SFて何の言葉の略かわかります?」との質問に対して「そんなこと知ってるわけないでしょう……」と簡単に答え、その後は笑い転げる姿に端的に表れている。すなわちこのSF研とは、SFの何かを研究しようとする目的のために集まったり、1つの明確な問題意識や目標をもって活動している組織ではなく、要するに「仲良しグループ」なのだ。そういう現代風若者たちの人間関係がオモテに出ていることが、この映画全編を通じた大きな特徴……。そして、私は、そのことが悪いとは言わないものの、そんな希薄な人間関係に満足している今どきの若者たちに一抹の不安を感じているのだが……?

部室内恋愛は御法度……?

所詮この世は男と女。最近、意外と男女が「外」で知り合う機会が少ないため、社内結婚の比率が増大しているらしい……。するとそれと同じように大学内だって……?

私たちが学生の頃には、マセた奴が多かった(?)から、学生時代の男女間の恋愛はかなり大っぴらだったし、進行速度も速く、また恋愛度の濃密さも濃いものだったと思う。しかし今どきの若者はその点も割と淡泊……。このSF研とカメラクラブのように、同じ部屋の中に2つの部室があり、四六時中顔を突き合わせていれば、そこに何らかの恋愛模様が生まれ、ちょっとあやしげな雰囲気は漂ってきて当然……。しかしこの映画には全くといっていいほどそれが無い。せいぜい春華に好意を持っている甲本拓馬(瑛太)が彼女を映画に誘うため、チケットを2枚買って勤めるくらいのもの。

もっともこれは、かなり意識的だったことがパンフレットを読んではじめてわかった。すなわち本広監督のインタビューによれば、「そんな彼女たちがむさくるしいSF研究会の中において、何故、恋愛問題に発展しないのかと観客に思わせ

ないようにすること。普通に考えればカメラクラブの美女2人がいたら、SF研究会の野郎ども全員が惚れてもおかしくないですからね（笑）。その彼女たちの魅力を抑えて見せるのが大変でした」と解説されている。なるほど、そういう苦労を経て、最後の結末に行きつくわけだ……？

でもタイムマシンは怖い……

この映画はタイムマシンの矛盾と現実がトコトンこんがらがったうえ、最終的には「ああなるほど！」という「オールオッケー！」で終わるからいいようなものの、ガラガラ笑いつつ、ちょっと冷静になり、視点を変えて真面目に考えれば、これは結構恐ろしい話……。

- ①もし、あの時のオレと、今日からあの時にタイムトリップしたオレとが鉢合わせしたら……？
- ②あの時の〇〇時に帰って△△をするはずだったのに、予定どおりにそれができなかったら……？
- ③もし、進行している今に、過去から戻れなかったら……？ そして、
- ④もし、俺があそこで殺されていたら今の俺は……？

等々、わかったような、わからないような疑問点が次々と浮かんでくる。これは要するに後述の保積光太郎（佐々木蔵之介）が再三「理論的（？）」に説明しているように、タイムマシンには絶対的な矛盾があるということだ。また、誰だってあの時の、あの現場にちょっとだけタイムマシンで戻ってみるといのは刺激的な冒険で楽しいことかもしれないが、イザ本当に戻ったら……？ それは恐いことがいっぱい……のはず……？

もしもタイムマシンが裁判に利用されたら……

少なくとも裁判の世界においては、タイムマシンが登場したらえらいことに！もし民事、刑事を問わず、裁判においてタイムマシンの活用による証拠調べが可能になれば、刑事事件におけるポリグラフ（嘘発見器）の活用の可否などという小さな問題の比ではない。だって、裁判官ともども過去のあの犯罪やあの紛争の現場を直接覗ける（実況見分できる）わけだから、誰が誰を殺したか？ 凶器を

どこに隠したか？ 死体をどこに埋めたか？ などがすべて明らかに……。また夫婦関係においても、ちょっとした不倫の匂いを嗅ぎつけば、タイムマシンに乗ってその現場をチェックすれば、誰でも簡単にそのヒミツが明らかになる。そんなことが可能になれば、人間は誰にもウソをつくことができなくなるのはもちろん、個人的なヒミツを持つことすらできなくなり、すべてのプライバシーが否定されることに……。

この映画には「パズル解きの楽しさ」や「辻褃合わせの妙」が詰まっているが、もしもタイムマシンが裁判に……。？ と考えると、それはナチスや軍国主義の台頭より恐ろしいこと……。？

配役あれこれ

私は基本的に登場人物の多い映画は嫌い。なぜなら、そうすると各人のキャラがボケてしまううえ、ストーリーも甘くなってしまうケースが多いため。その悪しき典型が『オーシャンズ11』（01年）や『オーシャンズ12』（04年）。ところが、この作品は多くの人物が登場するものの、場面ごとにうまく喜劇っぽく処理しているため、あまり散漫になっていないのがうまいところ。5人のSF研のメンバープラス2人のカメラクラブのメンバーが核メンバーだが、途中からそこに30年後のSF研の田村が加わり、これがストーリー展開の鍵を握る主要な登場人物たち。いや違う、もう1人、いやもう1匹、大切な役割を果たすのが、野良犬のケチャ……。？

SF研の5人のメンバーの個性は映画を観てお楽しみいただければいいが、映画で主人公とされているのは甲本拓馬。これに対して2人の女優陣は優劣つけがたい微妙な位置づけだが、やはり上野樹里のビッグネームが光っている……。？

変なヤツ（？）あれこれ

以上の主要登場人物に対して、チョイ役ながらそれぞれに重要な役割を果たす変なヤツもアレコレと登場する。それも映画を観てのお楽しみだが、SF理論とタイムマシンの可能性について、一見いかにも理論的（？）で緻密な（？）理論を展開して、主要登場人物のみならず観客をも騙してしまう（？）のが、保積光

太郎。彼はSF研究会顧問の万年大学助手で、専門は「相対性理論」とのことだが、彼が黒板を使って展開する「理論」には映画を観ながら十分注目を……。

私は、今年の秋に公開される佐々部清監督の昭和の映画館を舞台にした『カーテンコール』の応援団のメンバーとなっているためもう1人注目したいのが、名画座という、将来廃館になる運命の古い映画館と、その主人（三上市朗）。B級SF映画について語るその姿は真剣そのもので、変なヤツだが、こんな連中が日本の映画を支えてきたのだとつくづく思う……？

全体構成と脚本の面白さ

本広監督は『踊る大捜査線』シリーズや『交渉人 真下正義』（05年）で有名だが、これらは事前のリサーチで大ヒットが予想されたものであるうえ、東宝のビッグプロジェクトとして取り組んだもの。しかしパンフレットによれば、この『サマータイムマシン・ブルース』は、本広監督が「映像演出を始めた頃に原点回帰してみようか」と考えていた時、『サマータイムマシン・ブルース2003』を観て、「これだ!」と思い、自らプロデュースすることになったとのことだ。本広監督にとっては、『サマータイムマシン・ブルース2003』の原作者であり、劇団ヨーロッパ企画の主催者でもある上田誠氏との出会いは「運命の出会い」となったわけだ。

この試写会での観客は例によって女性客が7～8割を占めているが、何と6月20日の『スターウォーズ エピソード3 シスの復讐』に続いて、この映画でも映画終了後オバチャンたちによる自主的な拍手喝采が……。これは今どき非常に珍しい風景。そのうえ映画終了後の本広監督らのおしゃべりにもほとんど誰も席を立たず、大いにノッていた。

さて今年の夏、この『サマータイムマシン・ブルース』がどのような劇場でどのように公開されるのか、またそれに向けてどのような宣伝活動が展開されていくのかが注目されるが、あの『スウィングガールズ』（04年）が予想を超えて大ヒットしたように、意外とこの映画もヒットするのでは……。もっともそのためには、各大学にある（？）「SF研究会」の学生たちが、この夏熱く燃えることが必要かもしれないが……。？

2005(平成17)年6月29日記